



〒892-0841 鹿兒島市照国町13-42  
カトリック鹿兒島教区  
電話099(226)5100  
振込口座 02030-2-8359  
編集発行人 末吉卓也  
1部60円年間千共1100円

道標

【司教区昇格五十周年】  
小教区が活性化し  
教区が一つとなるように

# 糸永司教の後任に

## 郡山健次郎被選司教

十二月三日(土)ローマ時間正午(日本時間午後八時)、教皇ベネディクト十六世は糸永真一司教の後任として教区司祭郡山健次郎神父(志布志教会)を鹿兒島司教とする旨を公式発表された。司教叙階式は、一月二十九日(日)午後二時から鹿兒島カテドラル・ザビエル教会で行われる。

### 司教叙階式は1月29日(日)

#### 2時から鹿兒島カテドラルで

郡山被選司教は一九四二(昭和一七)年八月二十日、大島郡竜郷町瀬留で郡山為業・セツ夫妻の次男として生まれる。地元中学校を経て名瀬の県立大島高等学校を卒業後、鹿兒島に出て予備校に通っている間に司祭への召命を覚えて、一九六四年四月、教区神学生として福岡のサン・スルピス大神学院に入学。八年に亘る知的および霊的準備を経た後、一九七二年二月



郡山健次郎被選司教

に苦闘した方である。師が小さい頃、家にお客がある時、いつも師の頭に手を置いて「この子は司教になる」と言っていたという。

二十日、名瀬の聖心教会にて糸永司教によって司教に叙階された。被選司教の司祭召命の芽は、ご本人によればおそろく小さいときからの御両親の言葉にあるという。御両親はすでに故人となられたが、お父上の為業さんは、戦前から宣教師を助けて教会のために尽力し、戦時中の軍部による大島教会迫害下にあつては教会と自らの信仰を守る闘いに苦闘した方である。師が小さい頃、家にお客がある時、いつも師の頭に手を置いて「この子は司教になる」と言っていたという。

### 任命を受けて

#### 郡山被選司教

今回のサブライズ人事。誰がびっくりしたかといえ、もちろん、本人でした。司教様から呼ばれて「：ア、ンタだ」と言われたときは「エッ、ボクがですか!」と思わず叫んで、笑ってし

いたという。御母堂セツさんも、そのような御主人を支えながら七人の子どもたちを育て上げ、信仰を育まれた。そのご母堂は師に「世の中で一番偉いのは神父、一番目が医者だよ」と語っていたよし。自らの召命体験を語る中で、神学校行きを決意する折りにこの両親の言葉を思い出さざるを得なかった、と述べたことがある。司祭としての歩みは、職歴(別項)が示すように多彩な活動経験の持ち主である。司祭としての三十二年間に赴任した教会は、助任、主任司祭を含めて八小教区教会に及ぶ。司教区草創期からの田辺・田原師を別に

すれば、教区司祭では最も転勤の多い司祭であろう。その間に一年間の米国・フィリピン研修期間があり、教区の各種担当も数多い。ここ十数年はマリッジ・エンカウンター(通称M・E)の日本担当者の一人としてアジアを中心に海外への出張も度重なる。こうした経歴が示すように、極めて活動的、かつ積極的な被選司教であるが、一方、よく祈る人である。むしろ、毎日じっくり主と向かい合うことで、同僚の司祭たちに「とてもまねることができない」と言わせるほどの活動性を支えてきたのであろう。一年間の海外研修、ことにフィリピンでの半年の体験が師の目を広くアジアの教会事情に目を向けさせることになったと思われる。国内でもフィリピンからの滞日信徒の司牧に多大な関心をもち、現任地の志

まっただぐらいます。おそろく私のことをよく知っていた仲間の司祭たちも同じだったのに違いありません。それは、ちょうど、音楽審査(オーディション)を受けたこともないのに、いきなり観客席から華やかな舞台上に上げられ、たくさんのライトをあびせられて、いるような感じ、いまだに、戸惑いと一種の恥ずかしさの中にいます。ところで、新しい使命を受けたとはいえ、自分自身の生き方になんらの変更を加えるつもりはありません。ですから、モットーはと聞かれたら、答えはやはり同じです。つまり、「それでも、喜び一杯。希望一杯。神様ありがとう」です。十字架という

不条理の死を強いられたにもかかわらず、「彼らをお救いください」と祈られたこの気高い姿こそ、わたしたちに残された、主の遺言だったというのが私の信仰です。このモットーが、鹿兒島中に響き合い、うねりとなって、一人ひとりが喜びで輝く教区を夢見ています。

### 郡山健次郎被選司教職歴

1972年3月20日司祭に叙階、72年4月聖心教会助任、74年4月鳴池教会助任、78年4月種子島教会主任、83年4月海外研修(米国で英語、フィリピンのEAPIで司牧研修)、84年4月ザビエル教会助任、86年4月吉野教会主任・同幼稚園長、94年4月玉里教会主任・教区書記長、01年4月志布志教会主任・同幼稚園長、05年12月3日鹿兒島教区司教に任命  
※この間、青少年司牧担当、滞日外国人司牧担当、CLC担当、家庭を考えるチーム担当責任者、司祭評議会評議員、M.E.(Marriage Encounter)担当。教区カトリック相談電話(「鹿兒島きぼうの電話」)を立ち上げ、運営委員長としてその充実を図る。

布志教会ではそのためにも力を注いできた。教区の事情からベトナムからの教区神学生受け入れが決まると、糸永司教の委託を受け、数回現地に飛んで受け入れ神学生の募集と面接、現地の司教方との交渉にあたり、周知のように、四人の神学生を得ることができた。

カトリック新聞の任命公表記事で自らコメントしているように、制度や組織とは縁遠い、どちらかといえば苦手な性格だとご自分ではおっしゃる。それはそれで教区の司祭たちや修道者、信徒たちの協力が得られよう。それよりも、被選司教の堅固な信仰と神の導きへの強い信頼、繊細な感

性と根っからの誠実さを生かして下さることに大きな期待がもてよう。教区の「鹿兒島きぼうの電話」の生みの親でもあるが、まったくのゼロから諦めることなく、忍耐強く、善意の人々の力を一つにまとめて、「孤独に悩んでいる人たちのために教会が役に立ちたい」との夢を現実にした。

「神さまが『もういいよ』とおっしゃるまでは希望がある」とはそのおりの口癖であったという。その言葉を、これからは県民と教区民のために生きて下さるに違いなし。「喜びと希望をもって」新司教就任を祝いたい。

## 2006年 明けましておめでとうございます 平成18年

司教 糸永真一  
被選司教 郡山健次郎  
司教総代理 竹山 昭

### 鹿兒島地区

小限憲士(始良)、牧山田一(指宿)、小川靖忠(加世田)、泉 浩二(鴨池)、永山幸弘、末吉卓也(ザビエル)、J・ムーベルガ、有馬信茂、頭島 光、大松正弘(谷山)、G・サンタマリア(玉里)、橋口啓悟(吉野)、O・ベルナルディーノ(種子島)、国原武志(国分)、松森孝郎(マリア山荘)、竹山 昭(教区本部)、L・レデスマ(純心聖母会鹿兒島修道院)、田迎 徹、成相明人(引退)、浜崎真実(出向)

### 大隅地区

M・ヴィゴロ(鹿屋)、東 研(大根占)、郡山健次郎(志布志)、田原 章(垂水)

### 北薩地区

W・フリチエル(出水)、山口重義(阿久根)、M・アッシュヤー(入来)、J・レヒナ(大口)、J・ハンマ(川内)

### 大島地区

大野和夫(地区長館)、内野洋平(大笠利)、寝占敦之(瀬留)、美島春雄(大熊)、中野裕明(名瀬聖心)、木村敏彦(小宿)、柳本繁春(古仁屋)、瀧 憲志、浜田盛茂(古田町)、岡 俊郎(カトリック長浜研修所)

### 徳之島地区

福岡英雄、石田 望(母間)、T・メニッヒ(和泊)

### 司祭評議会

糸永真一(会長)、竹山 昭(副会長)、小川靖忠(事務局長)、寝占敦之、中野裕明、泉 浩二、頭島 光、福岡英雄、内野洋平、M・ヴィゴロ

# 「バベルの塔」物語

## 聖書の人間理解 (10)

竹山 昭

旧約聖書の初めを飾る「原初史」最後の物語は「バベルの塔」物語として知られるものである(十一・1-9)。この後は二つの系図が続くのである。

ここには、一見、世界の諸民族の言語がなぜ異なるのかを説明する原因譚が述べられているように見える。それは人間の傲りに対する神からの裁きの結果だ、と。しかし、それほど単純な話だろうか。

人間の傲り  
確かに、ここには人間の傲りとそれに対する神の裁きの主題が見られよう。

古代オリエントでは建設材料として泥から干しレンガをつくって用いた。それを焼けばもっと強固な材料になる。漆喰よりも丈夫な接着剤としてのアスファルトがあれば高い塔も建てられる。この建築技術を用いて「天まで届く塔のある町」を建設したくなるのは、現代建築技術を駆使して高層建築に挑む現代人と変わりはない。

しかし、もし「天まで届く」のうちに神の世界(天)にまで至ろうという野心を含むのなら、それは人間の傲りである。聖書の言う「罪」はここから生じる。

また、「有名になる」とは「名をつくる」、「名を成す」ということで、大島氏によれば聖書では神の専権事項だという(旧約聖書と現代)。

その目的が「全地に散らされないために」とは、人類に対する神の祝福が「生めよ、増えよ、地に満ちよ」(創世一・28、九・1)であつてみれば、それに逆らう中央志向への拘りでもあろう。確かに、神を押しつけ、人間が中心になろうとする人間の傲りが批判されている。

### 言葉を混乱させる

人間の傲りを砕くのに神は「言葉を混乱させる」という手段を用いる。それは何を意味するだろうか。すでに創世記十章には「氏族、言語、地域、民族」とにまとめられた民族表が述べられており、言語の多様性は自然なこととして前提されているからである。

大島氏が言うように、「言葉が通じる」とは「心が通じる」「考えが通じる」、つまりコミュニケーションのできることである以上、言葉の混乱とは、コミュニケーションの混乱、のことでと言えよう。「聞き分けられぬようにしてしまおう」(九・7)とは、「互いに言葉を聞かないようにしよう」との訳も可能だといふ。だとすれば、単に言葉が通じないというよりも、異なる考えや文化を持つ人びとが互いに相手を理解しようとならない、ということになる。

バベルの塔は外からの力というよりも、人間の傲りによる内部崩壊(コミュニケーション

「神々の門」と呼んだ。それは多数の言語、多様な文化を呑み込んでオリエントを支配するバビロンに相応しい。神々はそれぞれの文化を代表するからである。この物語の語り手は、しかし、それを「混乱」と呼ぶ。

### 覇権主義批判?

もつとも、この話の記述が含む様々のしから「バベルの塔」物語は、全人類について語るといふよりバビロンという特定の都市を対象としての批判だ考える専門家もいる(石田友男「聖書を読み解く」)。

古代オリエントでは地域間の交流は盛んであり、諸民族が各自の言葉を持つことはよく知られていた。十章の民族表もそれを前提とする。しかも、この物語の結末は明らかにバビロン批判で終わっている。古代オリエント世界の覇者であったバビロンの公式な言語アッカド語は当時の公的な外交用語でもあった。バビロンの人びとはアッカド語でバビロンを「バブ・イル」

石田氏の見解は独特の説得力をもつが、その是非の判定は私の分を越える。ただ、よく見られる先のような見解であれ、石田氏の見解であれ、根本的には、人間が神の立場に座ろうとする抜き難い傾向が人間自身の混乱を結果することへの戒めとみる点では相違ない。人間が共通の言語を回復できるか否かを原初史は語らないが、それは現代の我々にも重要問題であろう。

## 教皇さまへの

### 子供たちの質問 ③

アレッサンドロ「ミサにあまり、聖体拝領を受けることは、ぼくたちの毎日の生活にとってどのように役に立つのでしょうか」

教皇「ミサにあまり、聖体拝領を受けることによつて、私たちは生活の中心を見いだすことができます。私たちがはたかさんのものに囲まれて生きています。教会に行かない人は、自分たちにまさにイエスが欠けていることを知らずにいます。けれども、彼らは自分たちの生活に何が足りないことを感じています。神が私の人生にいなければ、どうなるでしょう。イエスが私の人生にいなければ、どうなるでしょう。イエスは、私を導くかただからです。私になくしてはならない友だからです。人生の大切な喜びだからです。私を人間として成長させ、私が悪い習慣に打ち勝ち、人間として大人になるための力となるかただからです。ですから、イエスとともに過ごし、聖体拝領を受け、

受けることによつて、どういふ効果があるかを、ただちに知ることはできません。けれども、何週間がたち、何年かが過ぎたのちに、私たちは、神がともにおられないこと、イエスがともにおられないことを、日増しにはつきりと感じるようになります。神がいけないことは、とても重大で、破壊的な影響を及ぼします。何年もあいだ無神論が支配した国々のことをかんたんに思い出して、とができません。そこでは、どれだけ心も大地も破壊されたことでしょうか。このことから、聖体拝領を受けて、イエスに養われていたことが、大切なことがわかつてきます。それは、何よりも大切なことだといつてもよいと思います。私たちが照らし、私たちの人生を導いてくださるのは、イエスです。イエスは、必要なきに私たちが導いてくださいます。」

カトリック中央協議会司教協議会秘書室研究企画画記

### <KABAYAN SEKSIYON>

#### "Huwag mong pagnasahan ang maybahay ng iyong kapwa"

Dito sa pangsiyam na kautusan, sinasabi sa atin ni San Juan ang tatlong uri ng kasakiman: makalupang pagnana sa kasakiman ng mata at pagmamalaki sa sariling lakas. Sa tradisyon turo ng Katoliko ang pangsiyam na utos ay ipinagbabawal ang makalamang kasakiman. Ang ibig sabihin ng "kasakiman" ay ang porma ng intensiyon ng makataong pagnanasa o pagnanais. Sa kristiyanong teolohiya ay binibigyan ng partikular na kahulugan: ang galaw ng pandamang gana na kontra sa pamamahala ng pantaong rason. Sinasabi ni San Pablo na ito ang pagrerebelde ng "laman" kontra sa "espíritu". Ang kasakiman o pagnanasa ay ang bunga ng hindi pagsunod ng unang kasalanan. Ito'y kontra sa aral ng kabutihan, kaya ang tao ay nahuhulog na gumawa ng kasalanan. Dahil ang tawo ay may espiritu at katawan(laman), na mayroon ng tensiyon sa kanya (sa puso niya), ito ang pakikibakag ng "espíritu" at "laman". Ang pakikibakag ito ay namana ng kasalanan ng unang mga magulang natin, si Adam at si Eba. Ito ang bunga ng kasalanan na gumagalaw sa buhay ng tao(natin) Ito ang araw-araw na karanasan ng pakikilabang espirituwal. Nakatanim na sa puso ng tao ang kasalanan ito: "Talaga, sa puso nagmumula ang masamang hangarin-pagpatay sa kapwa, pakikipid, kahalalahan, pagmanakaw, pagsaksi nang di totoo, panirang puri." (Mt. 15:19). Ang pakikilaban kontra sa masamang hangarin ng laman, kailangan na lini sin ang puso at pagpigil sa sarili. Dito napapaloob ang kalinisan ng puso, ng katawan at ng pananampalataya. Sa kalinisan ng puso doon natin makikita ang Dios na buhay. Ang bunga ng kalinisan na ito ay makikita sa mabuting gawa at salita, naiwasan ang paggawa ng masama sa kapwa. Ang kabusilakan ng puso ay kailangan ang pagiging mapasensiya disente at pagunawa. Ang kayumian ay ang nangangalaga sa kaibuturan ng puso ng tao. Kailangan din ang pagdarasal para makaiwas sa lahat ng kasamaan at pagnanais ng laman. Kaya mga kababayan, magtulungan tayo... magbigayan tayo... huwag isipin ang sarili lamang... maging bukas sana tayo sa mga kababayan natin na nangangailangan, hindi sa bagay na materyal kundi lalung-lalo na sa bagay na espirituwal. Hingin natin sa Dios na maawain ang Banal na Espirito Santo na siyang mag-gagabay sa atin sa lahat ng kabutih-an at para sa magandang layunin natin sa ating kapwa.

MALIGAYANG PASKO AT MANIGONG BAGONG TAON SA INYONG LAHAT!

## 1月

### 「十字架の使徒会祈りの意向」 小教区の活性化

1日(日) 神の母聖マリア 世界平和の日  
「世界平和の日」

教皇パウロ六世は一九六八年一月一日、ベトナム戦争が激化するなか、平和のために特別な祈りをささげよう呼びかけました。それ以来、全世界のカトリック教会は毎年一月一日を「世界平和の日」とし、戦争や分裂、憎しみや飢餓などのない平和な世界が来るように祈っています。

平和はキリスト教そのものに深く根ざしています。キリスト者にとって平和を唱えることは、キリストを告げ知らせることにはかくなりません。新年にあたって「信仰の原点に立ち戻り、すべての善意ある人々と手をたずさえて、平和な世界の現実に向かって、カトリック信者としての責任を果たしていく」(日本司教団「平和への決意」)ことができるよう決意を新たにしたいと思います。

4日(水) 教区本部仕事始め

ルカ・デジャック神父命日(一九九八年)

七田八十吉神父命日(一九八〇年)

8日(日) 主の公現

9日(月) 主の洗礼

14日(土) 永島泰蔵神父命日(二〇〇二年)

15日(日) 年間第二主日

18日(水) キリスト教一致祈禱週間・25日まで

19日(木) ローター・ハイシク神父命日(一九八九年)

22日(日) 年間第三主日

▼信仰一致祈禱集会・14時・日本バプテスト連盟鹿島キリスト教会

25日(水) 聖パウロの回心

29日(日) 年間第四主日

▼カトリック児童福祉の日(献金)

▼郡山健次郎被選司教司教叙階式・14時・鹿児島カテドラル

## 2月

1日(水) 大勝教会献堂記念日(一九六二年)

2日(木) 主の奉獻

5日(日) 年間第五主日

# 聖霊の恵みの中で交流

## 徳之島地区教会が島内巡礼と堅信式

十一月二十七日(日)、徳之島地区教会(母間小教区)では毎年恒例の島内巡礼を実施、島内の各教会から信徒が花徳教会に集まり、糸永司教の司式により堅信式が行われた。

母間小教区(主任・福岡英雄神父、助任・石田望神父、信徒数四百九十四人)には池間、花徳、山、轟木、亀津、下久志、岡前、平土野、面縄という九つの巡回



教会を含む十の教会がある。この日の島内巡礼は信徒が一つに集まり神の家族として交わりを深めるために行われるもの。二十七回目となる今年は、天気にも恵まれ、十一月末とは思えない汗ばむほどの陽気のなか、十二人の信徒が六キロほどの道のりを徒歩で巡礼したほか、それぞれの巡礼の仕方方で花徳教会に約百人の信徒が集った。

### 晴佐久神父招き講演会

#### 鹿兒島カトリック女性信徒の会

十一月二十四日(木)、鹿兒島カトリック女性信徒の会(平野博美会長、主催)で、東京教区の晴佐久昌英(はれさくまさひで)神父

集まった信徒たちは他の教会の信徒と一緒にミサに与る喜びと共に、堅信の喜びにあふれていた。

ミサの中で糸永司教は、「キリストによらなければ私たちが救われない。だからイエスを強く待ち望もう。キリストを信じていない人も救われるように、救いの教えを伝えて行こう。特に平土野と亀津は幼稚園という社会との大きなパイ

プを活かして、宣教計画をしつかり立てて頑張つて欲しい」と信徒たちに宣教への励ましを送った。

堅信式後司教から記念のカードと「信仰生活指針」を渡されたジャンヌ新田和加子さんは「これからも教会での勉強を続けていきたい」と語り、アッスンタ向井照子さんも「一人でもいからこのキリストの教えを伝えていきたい」とこれからの信仰生活の意気込みを語った。

また現在、母間小教区では、平土野教会の建築を進めていることもあり、前日二十六日の夜には司教を囲んで母間小教区の役員や平土野教会建設委員の信徒などが集まり司教と夕食を共にした。

継続して行われている島内巡礼や教会建設を通して若い信徒も教会にかかわる姿が見え、二人の若い神父を中心に島内の信徒の一致団結している様子が伺える徳之島で、信徒たちが自分達を「兄弟」と呼んで、司教に紹介する姿が特に印象的だった。

### フィリピン人のため黙想会

#### デイリーノ神父招き徳之島地区教会

十二月十日と十一日に待降節の黙想をした母間小教区では、十一日の午後からはフィリピン人のための黙想会を亀津教会で開いた。これは小教区内に大勢いるフィリピン信徒のための配慮からで、指導にフィリピン人のベルナルディノ神父(種子島教会主任)を招いた。タガログ語での黙想会には約六十人のフィリピン信徒とその子供たちが集まり、講話とゆるしの秘跡、ミサがあった。集まった信徒は母国語で話が聞け、ゆるしの秘跡が受けられることが嬉しかったよう

### 「短信」

#### 連合壮年黙想会

鹿兒島カトリック連合壮年会(有川弘文)会長で



神父との会話も弾んだ。ベルナルディノ神父は「自国語で話すも彼女たちも嬉しいようで、心を開いてくれるし力を感じた。子どもたちにも彼女たちなりに信仰を伝えようと努力している事に感動した。さまざま不安を乗り越えられるように教会に来るよう勧めた」と話し、同郷の信徒への司牧に喜びと使命感をあふれさせていた。

テルであった。参加者は、プロテスタント三人、カトリック二人。午前中ホテルのチャペルで、日本ハリストス正教会の及川信司祭の導きで礼拝した後、同教団の創立者、聖ニコライの話が同師により行われた。その後昼食を共にしながら情報交換をした。

#### 鹿兒島市民クリスマス

十二月十一日(日)鹿兒島キリスト教会連合主催の市民クリスマスが県民交流センターであった。

#### チャリティー市民クリスマス

十二月十一日(日)西薩キリスト教連合主催の第二十二回チャリティー市民クリスマスが川内文化ホールで開かれた。

### キリスト教一致祈禱集会

日時: 1月22日(日) 14時  
場所: 日本バプテスト連盟 鹿兒島キリスト教会

### 新司教選出の喜び

#### 被選司教の出身地瀬留小教区

十二月三日、鹿兒島教区の保護者聖フランシスコ・ザビエルの祝日に発表された「郡山健次郎神父の鹿兒島教区司教選出」の知らせに教区中が感謝と喜びに包まれた。中でも、郡山被選司教の出身である瀬留小教区(主任・寝占教之神父)の信徒の喜びはひとしおだった。

四日(日)のミサ中に知らされた信徒たちは、静かにかみ締めるように知らせを聞き、誰かれとなく拍手が沸き起こり、ミサ後には信徒から、司教出身の小教区として心構えを新たにする声が聞かれた。また、早速、司牧評議会では霊的花束

#### 雄さんは「嗚呼、遂に瀬留小教区から夢の司教様が誕生した。大きな大きなクリスマスプレゼントである。いや、瀬留小教区史に残る一大慶事である。われらの誇り、瀬留小教区の名譽、これに勝る慶びはない。郡山神父様、誠におめでとうございませう」と喜びの声を寄せた。

を贈ることや、被選司教に続けと新たな司祭百命を育てることなどが話し合われた。「小教区内には、静かな中に何かしら神聖な雰囲気漂っています」と寝占神父は喜んでいました。

の講演会がザビエル教会で行われた。同会主催の講演会としては異例の約二百四十人が参加した。神父は「神はあなたに話したい」のテーマで、神と直接につながることを現実にする秘跡、特にミサが持つ救いの力について話した。

人間に対する神の心は、親が赤ん坊をあやすときの

親心が最も美しく現われており、これ以上のものはない。教会の活性化は、ミサで実現している救いを皆がどこまで信じて、実際に救われているかとの正比例だと述べた。

講演後はミサがささげられ、神への信頼と秘跡の力に対する確信に満ちた神父の姿と言葉から、多くの人が豊かな恵みを受けた。

### 仙台司教決まる

#### 平賀被選司教

教皇ベネディクト十六世は十二月十日(土)、一年半空位だった仙台教区の司教に同教区司祭の平賀徹夫神父(六十歳)を任命した。仙台司教叙階式は三月四日(土)午後一時から仙台白百合学園講堂で行われる。

平賀被選司教は一九四五年、岩手県花巻市生まれ。七四年に司祭に叙階。



ウルバノ大学留学後、仙台教区事務局局長を務め、また同教区の各小教区で司牧に従事した。九四年からは二年間カトリック新聞社編集長、また二〇〇三年からは教区司教総代理、教区管理者を務めた。

講話とフリーディスカッションの黙想会では、教区が採用した終身助祭制度と第二バチカン公会議以降の教会の諸活動についての理解を深めた。

#### ▼牧師神父の会

十二月六日(火)、年に数回行われている、牧師・神父の会が鹿兒島市内のホ

# 読むしるしの時

## 2005年教区10大ニュース+1

- ①「第十二回教区評議会のまとめと勧告」発表(1月27日の司祭大会)  
主日ミサ参加率低下、青少年の教会離れ、司祭召命減少に象徴的に現れた教区の危機的状況を克服するための思い切った司教の提言
- ②司教区昇格五十周年開始ミサ(2月27日・カテドラル)  
司教区昇格勅書に立ち返って、「司教区」の意味と使命を考える。
- ③聖体一日礼拝小教区リレー開始(2月27日・ザビエル教会)  
聖体の年の教区行事として、九月まで、感慨深く全小教区を一周
- ④故教皇ヨハネ・パウロ二世の追悼ミサ(4月6日・カテドラル)  
在位二十六年、八十四歳。初めて日本を訪れた教皇
- ⑤新教皇ベネディクト十六世就任祝賀ミサ(4月24日・カテドラル)  
「聖なる、普遍的、使徒的、唯一の教会」
- ⑥初のベトナム人教区神学生(5月25日・沖繩での教区司祭黙想会)  
ガブリエル・ティエンさん受け入れ。八月十六日、マニラで勉強中の三人が鹿兒島教区神学生に追加登録
- ⑦WYDケルン大会に青年グループ派遣(8月)  
司教区五十周年記念企画、十人が参加(福畑神学生も長崎コレジオから)
- ⑧司教区昇格五十周年記念ミサ(9月19日・カテドラル)  
司祭・修道者ばかりでなく、特に信徒の役割と功績に光が当てられた。
- ⑨初の終身助祭叙階式(9月19日・カテドラル・記念ミサ中)  
終身助祭制度の先駆け

として、桃蘭淳一郎師(鴨池教会カテキスタ)と久保俊弘師(教区の教誨師)⑩宣教奉仕者養成コース始まる(10月23日・教区本部・担当永山神父)  
参加者二十六人(始良、加世田、鴨池、鹿屋、ザビエル、玉里、紫原、吉野)

⑪糸永司教後任に郡山健次郎被選司教(12月3日)  
司教叙階式は一月二十九日(日)十四時カテドラルで  
(⑫以外糸永真一司教選)

### お分けします！ 教区報縮刷版

鹿兒島カトリック教区報は、一九六二年創刊以来、教区の歴史を記録してきました。教区では、司教区五十周年を記念し、この教区報を資料として活用していただくことと、創刊号から二〇〇四年十二月号までを縮刷版(A4サイズ)にまとめ、入手希望の信徒の皆さんにお分けしています。ご希望の方は教区本部までご連絡ください。  
☎〇九九―二二六―五二〇〇

### 教区の歩みと信仰養成

#### 信仰養成委員会報告

司教区五十周年を迎えた今年、鹿兒島教区では記念ミサを中心さまざまな取り組みが行われた。十一月四日(日)に教区本部で行われた信仰養成委員会では、今年の教区の動きを振り返りながら、今後の信仰養成のあり方について話し合われた。

**ザビエルさまの散歩道**  
新たな一歩を踏み出して  
新年明けましておめでとうございます。  
昨年末に鹿兒島教区には嬉しいニュースが飛び込んできました。新しいパパ様ベネディクト十六世から、郡山健次郎被選司教様が鹿兒島教区に与えられました。  
この喜びが私たちに発表されたのは、十二月三日、そう、私たちの鹿兒島教区の保護者聖フランシスコ・ザビエルの祝日です。まさに鹿兒島教区の喜びにふさわしい日でした。

鹿兒島教区報の縮刷版を開いて、三十六年前の糸永司教様の鹿兒島司教任命の頃を振り返ってみますと、なんとその発表も、同じ時期、十二月二日だったようです。  
三十六年前も今回も、ザビエル様の祝日と新司教誕生の喜びが重なるとは、神様のお恵みを一層感じます。  
その頃の郡山被選司教様は福岡の大神学院で十二月十四日に「守門、読師の下級聖品を受けた」とあります。今で言う朗

読奉仕者の選任を受けたということかな？ その頃の郡山神学生も新たな使命に燃えていた頃だったことでしょう。  
今年、ザビエル様が生まれてちょうど五百年にあたります。新しい司教様も生まれることですが、私たちが新たな気持ちで歩んでいきたいですね。  
ザビエル上陸記念祭実行委員会から▼このコラムでは皆さまのザビエル神父様への想いや様々な声をお待ちしています。今後ともご協力をお願い致します。当コラムへの寄稿は四百字以内で教区本部・久保まで

### 文芸

#### 俳句 (思川俳句会作品)

純心学園 山頭信子  
夕時雨生徒の落書消しがたく  
ミサ行きてあかぎれいたむささげの手  
(評) 深愛の結句がよい。

鹿兒島 徳永ノブ子  
セーラー服遠き思い出針供養  
鹿兒島 本城 愛  
朝日さす座敷におとす晴着かな

鹿兒島 春山マリ子  
お正月 花毯 鈴毯 毛糸毯  
名瀬 松畑義弘  
点眼の一滴の涙や冬の星  
船旅や天心にかがよふ寒昂

(評) 句歴を感じさせる佳作  
出水 遠竹睦郎  
初物を神に供へて年迎ふ

純心学園 川上 和  
ひっそりとキリシタン灯籠境内に立つ  
純心学園 田村鏡子  
運動会指の先まで楽しけり  
鹿兒島 龍門司真人  
初日さす聖に笑まむ新司教  
主よ主よと呼ぶ初夢や妻の声

#### 短歌 (思川短歌会作品)

名瀬 林 明子  
とめどなくあふれるなみたつかれきつた  
このからだを主にあずけます  
小さい愛情をたきしめる夜は母さんの手  
につつまれるように眠りぬ  
(評) 口語短歌は特に結句が一首を成す。

出水 遠竹睦郎  
初物の大けき早掘り笥を掘り来て神  
に供へ食しぬ

純心学園 川上 和  
マラッカよりさつまつ目指されしザビエ  
ルの熱き思いに日々倣ひけり  
鹿兒島 春山マリ子  
現代の女性の気持ちわかるけど神も仏も  
宿り少なし  
鹿兒島 前田儀子  
祈るごとよき歌になれと寄る窓に夜  
更けの雲より満月生るる

純心学園 川上 和  
古仁屋 豊島忠司  
何処からか這入り来れる沢蟹の真つ  
赤な奴を夜に追ひ出す  
阿久根 中津濱フサエ  
キリストの誕生祝いつつ振り返る夫  
との生活六十年を

鹿兒島 田平新太郎  
新しく教へたまわる司教故日々の暮らし  
の父と尊ぶ  
修学の孫の旅路は水清し雪の螢の舞お  
たる河

### オルガンコンサート

#### 第二回ザビエル教会主催

期 日…3月11日(土) 18時30分〜20時  
テマ…「受難」バッハ・オルガン小曲集  
よりー  
演奏…高坂 暢(こうさか のぶ)氏  
ドイツ国立フランクフルト音楽大  
学卒業

会場…ザビエル教会  
入場料…全席一、〇〇〇円

れ、終身助祭制度の導入と助祭の誕生、信徒奉仕者制度の導入の三つを挙げ、「鹿兒島教区の新しい司教体制が見えてきた。共同体に奉仕するチームでの司牧体制構築が始められている」と教区の動きを解説した。

信徒奉仕者制度の準備として、福岡サン・スルピス大神学院での神学養成講座に参加した人の感想、教区内における宣教奉仕者養成講座の様子も報告され、活発な意見交換がなされた。各委員からは、信徒たちの前向きな意欲や熱意が見られるという意見や、実際に小教区で信徒が、司祭と助祭と信徒奉仕者でチームを組んで奉仕するには、より一層の司祭の理解が必要だとの意見も出された。

また、各担当や信徒団体の報告が行われ、女性信徒の会(橋本嘉奈子)、連合壮年会(迫一夫)、教師の会(岩崎)、青少年担当(末吉卓也神父)から活動の様子が報告された。召命担当の泉浩一神父からは長崎の小神学校の体験入学の様子が報告され、参加者のうち数人が入学の希望を持っていると嬉しい知らせがあった。

**カトリック新聞**  
カトリック新聞は、日本のカトリック教会唯一の週刊全国紙です。全国、海外の購読者様のお手元へ毎週直送いたします。また、全国のサンパワロ・女子パワロ教会でも販売しております。

1部本体価格150円(税・送料別)  
購読料金(前納、税・送料込)  
半年4740円・1年9480円

見本紙贈呈いたします

〒135-8585 東京都江東区潮見2-10-10 日本カトリック会館5階 カトリック新聞社  
TEL 03-5632-4432 FAX 03-5632-7030 Email kodoku@cwjpn.com